

Aaron Rio 「Sさんを待ちながら」

ミニバスの運転手と二人きりでガタガタ山道を走っている。ちょっと前までは農家と田んぼとガソリンスタンドが少なからずあったけど、今は窓から外を覗くと、杉林の起伏ばかりが続き、真夏の昼間なのに杉が太陽を遮ってほとんど真っ暗。ミニバスの運転手は、僕の不安な表情に気づいたのか、「カントリーサイドやねん」と、わけのわからない日本語で喋り出してくすくす笑っている。カントリーサイドか、それはちょっと控えめに言っているんじゃないか。と思いながら、やがてまた杉のリズムに戻って痺れる…

その数年前に、大学を卒業したら大学院で日本の美術史を勉強すると決心した。まずはまだ行ったこともない日本を味わってみようと思って、航空券代を稼いだら一週間東京へ。新宿西口の夜の賑わい、東京国立博物館で見た大徳寺聚光院の襖絵、山手線の大混乱、はじめての酎ハイ、今は顧みるとそれぐらいしか思い浮かばない。帰国後、ジェットプログラムに応募して、仏教美術に憧れたので軽々しく奈良と京都を第一、第二希望にした。

卒業後の夏、一日千秋の思いで待って、遂に文部科学省から手紙が届いた。「Placement」という欄にローマ字で「Soni Village」としか書かれてない。ワクワクしながらインターネットで検索してみても結果が出ない。漢字も分からず、グーグルマップがまだ存在しないあのとき、憂色を帯びながら日本人の友人に聞いてみたけど、「ソニって？漢字は何だろう」。ぶつぶつ言いながら時を待っていると、「Soni Village」のSさんからの簡単な挨拶メールが入った。大変きれいな英語でなぜかほっとした。漢字も委細もわからないまま荷造りして、別れの挨拶をして、一夏を過ごした。関西空港に到着したら、優しそうなSさんが迎えにきてくれると期待していたけど、ミニバスの運転手しかいなかった。

…到頭、ミニバスが山から下りかけて無限の杉林が開けて、明々の山峡が広がっていく。田んぼとビニールハウスが並ぶ溪流の兩岸、農家が点在している山腹。唯一の道が軽トラだけで、河に沿って伸びて行って溪の遠端に消えていく。まさに桃源郷の如く、一度離れたら戻ることができなくなる。ミニバスがまた山に上って森を背にしているある小家の前に止まって「ジス、イズ、ハウス」とミニバスの運転手が口ごもって言う。ミニバスの運転手が一緒に荷物を中に運んで、しばらく半分関西弁（当時は一体何語なのかと思ったけど）半分片言まじりの英語で語りながら家を見て回ってものを指差す。布団、固定電話、冷蔵庫、炊飯器、洗濯機。浴室で、これ押し回しこれをガチャガチャ回転させ何とかなると細かいジェスチャーで何かを説明しているけど意味不明。「Sさん、来週、カムバック」と、妙に親切なミニバスの運転手が小腰をかがめながら家を去る。

ミニバスの運転手が指差した冷蔵庫の扉に、付箋紙で「Please drink!」とSさんによる指示が。中で見つけた「American Cola」の印がついた赤い缶を開けて、不味いけど飲みながら窓から目覚ましい景色を眺める。溪の向こう側に、あとになって名前がわかった「鎧岳」という山が空に聳える。目を下げると、前に広がる田んぼのど真ん中に腰の曲がった老婆が籠を運んでこっちを凝視している。んん？と思いながら、畳の上に横になってぐっすり寝入ってしまう。少しして、玄関から震える女性の声で「先生？先生？」と聞こえてくる。畳の上から襖をそーっと開けて首を伸ばすと、人の姿が見えないけど大きい段ボール箱が置いてある。躊躇しながらこそそと玄関へ這って行くと、なぞの箱にトマト六個、茄子二個、ほうれん草一束、信じ難いほどたくさんのお米（年間分？）など、ぎっしりと詰まっている。今も尚誰だったかわからないけど、あの田んぼの老婆だったと勝手に信じている。

暫くの間、幾人かの見知らぬ人が突然玄関に現れて、野菜とお米をくれたり、人がたくさん集まった誰かさんの家に連れて行かれて食べさせてくれたりした。酔っ払っているミニバスの運転手もなぜかよくいて、何時も「Sさんがー」なんちゃらかんちゃらと。はじめての日本酒もミニバスの運転手と。ある日突然、医者っぽいおじさんがエアコンを携えてきて説明も無く壁に取り付けた。

又の日、ミニバスの運転手が僕を車に乗せて、途中にあるおじいさんを迎えに行って、ある家の前に止まった。おじいさんだけが家に入って、20分後に車に戻って僕から3万円を求めてまた家に入る。おじいさんが10分後にもどったら、僕に車の鍵を渡して「マイカー」だと。帰りはおじいさんと「マイカー」になったばかりの軽車で。

ミニバスの運転手が約束した通り、着いてから一週間後にSさんが玄関に現れた。英語ぺらぺらの美人Sさんが僕の上司だそう。一週間ぶりの英語なのか、初めてなのに久しぶりの親友のように、多事な一週間でSさんに語り尽くす。田んぼの老婆が隣人のTさんでSさんの夫の母、エアコンを取り付けた医者っぽいおじさんがクリニックの院長のFさん、3万円を求めたおじいさんが教育長のMさん、姿を表さないマイカーの売り手が教育長のMさんの秘密の恋人、ミニバスの運転手がSさんの友人で役場の整備員のIさん、漢字が「曾爾」、等々Sさんが一週間の神秘を解いてくれた。

それから十年も経って東京で博士課程を終えつつある。不慣れなところも未だに多いけど、留学の経験や日常生活や研究によって、日本について色々学んできた。今でも、東京の喧騒から逃げたいときは、時折第二の故郷の曾爾へ。Sさんと一杯やりながら、現実の息抜き。そのときにいつも考える、今も僕が日本について「知っている」事のほとんどは、Sさんを待ちながら学んだ。